第四インター学生通信 No5

中核派政治局同盟

全学連大会を招集し、六九三闘争の戦列を固め、四月闘争の爆発を準備し、反帝統一戦線を領導せよ！

同盟は、六九三階級闘争のきわめて鮮烈なミッションを領導する任務を果すため全学連大会をなしとらねばならない。これと全学連大会を六九三政治闘争の第一の焦点四・一八沖縄闘争―国際反戦闘争以前に、二～三日大闘争を指導しきった時点でなしとらねばならない。

なしとるべき政治内容、即ち大会開催と領導すべき政治内容を要請する階級情勢と同盟の位置は次の諸点である。

①安保闘争は沖縄闘争を基軸として闘われるが、二四で本土の結果は、社共の下に統一した返還闘争を分解させる。沖縄現地の分解は明確に本土の諸党派の沖縄返還論を分解させる。戦戦議会主義諸党派と同次元に立つ中核派は戦略論上、運動論上とピンチに立つ。安保闘争の政治焦点が一切四三八で問われる。これに応えうる任務である。

②六六三の階級関係に耐え抜ける全学連を確立し、反帝統一戦線の基軸にSSSLを打ち固めることである。権力対三派の攻防を基軸とする階級関係が10・21～11・29を転機に社共反戦―反革命路線を前面に押し出した。権力の補助部隊をなす人民戦線に対決し、反帝統一戦線の基軸的任務をのゞ全学連が果しうるか否かに六九闘争の勝利的前進の展望がかかっている。

③[illegible]の性格変化は、国際的な帝国主義の政体変化と普遍的共通性をもちつつも、10・8～10・21の権力対三派の激突を軸として全国学園封鎖闘争との関連で特殊日本的性格を機動隊の政治的軍事的性格として体現している。これゆえに社共に背側攻撃を受けつつ、権力の反革命と日々対決する革命的左翼自体が直接的に前衛性を問われ、青解の社民への溶解と革マルの逆流を確定的なものとした。われわれを含めて革命的左翼が十日闘米阻止と四月闘争を目前に再編が問われていること。

④政治指導上および組織指導上の問題としては、10・8から10・21中央権力闘争で到達した政治闘争とこの質を堅持しつつ革命の陣形構築を目指した学園封鎖＝全共闘運動との、両者の内的統一の指導理論をソヴィエト運動を構築しLOを守保を引き抜く学生運動論としてならとり、諸党派を、七月全学連の共闘連合へ、その実体組織としての全国学園共闘会議へとわゞ全学連―SSSLのヘゲモニーのもとになしとることである。

以上四点の任務を三月全学連大会はなしとることゝ中心的課題となるため、なしとるべきは組織的政治的理論的一切の質を問うものとして組織されなくてはならない。

四よりゞ政治理論上の高水準、組織密集力の二点を軸に獲得されるべき大会とせる。

この様な任務設定から以上四点を深めてみたい。

次に課題は、安保―沖縄闘争論を四月闘争―十月闘争との関連で運動論的にいかに設定

するのである。戦略論上の沖縄闘争論は　世界同時革命の一環としての安保粉砕－日米両帝国主義同時打倒、日米プロレタリアートの国際主義にもとづく団結と連帯である。（戦略論文一六〇号等に述べてきたので略）

問題は　本土の安保闘争＝返還闘争と沖縄現地の基地闘争＝復帰闘争が、何を軸に連帯するかという問題である。マンドの主張は戦略主義的に位置付けるが、現況大衆の即自的要求をひきつける運動論的環を再たぬという批判がある。だが、事態を冷静に見るならば日米本国のマルジョアジーの侵略同盟に同調し　本土マルジョアジーの侵出と米軍事基地経済に依存する本土一体化路線でマルジョア的連帯をかちとろうとする部分と、本土と沖縄の社共に同調されて、マルジョア義会主義の枠内で民族主義に依拠して返還－復帰を統合さけんとする部分とが存在しにしすぎないのである。

今や佐藤の具体策提示と、直接的には二・四B52撤去ゼネストの設定によって、屋良－県共闘に結集約されてきた現地闘争は明らかに社共の枠を突破する左派を登場させ、社共の「復帰－返還」路線は分解する。例え、屋良＝県共闘がゼネストを倒れても、二・四以前の状況には闘争に参加した部分を再結集できず、かえって分解は強まろう。分解は旧来の㊀「復帰－返還」の議会路線と㊁核基地撤去を闘争に対抗レストライキと実力闘争で闘い抜く革命的部分に分裂するだろう。沖縄現地に革命的沖縄闘争が実力で展開された時、本土で「反還－復帰」を要求する社共の安保闘争路線は完全に破綻するだろう。二・四を契機とする沖縄現地闘争の分解を契機として、逆に本土の安保闘争論が分解し、われわれとのプロレタリア国際主義で連帯が現実化するだろう。

したがって、四・二六－二八闘争は、二・四総括の上に立って、社共との党派闘争を排みつつ、同盟の中核派沖縄奪還論を四月闘争で粉砕しつくす必要がある。われわれの政治路線上の党派闘争の軸は社共－そして中核派に定めて、打倒の方向を解放派と革マルに向けるべきである。

われわれは四月闘争で基地撤去実力闘争も闘えぬ本土の社共両党の安保沖縄闘争論を粉砕しつくし、東大闘争で現状秩序防衛派と連合して反革命に廻った日共の政治路線を大衆的に粉砕し、ブンド、中核排除で反戦破壊に狂奔する社民とこれに屈服する青解の政治主張をコップ・ミジンに粉砕し、中核派を共闘にまき込みつつ政治理論的に破産させ消耗させねばならない。

沖縄解放論をとなえる革マル・ML派は共に帝国主義論と無関係で過渡期世界論が全く理解出来ないところから発生した誤りである。革マルは、誤れる相互依存＝相互㊀反論から沖縄解放を位置づけるから、どのようにどこに解放するのか不明確である。MLは過渡革命＝人民戦争＝沖縄解放という体系的誤りをおかしている。

四月闘争は沖縄闘争論で諸党派を粉砕しつくして圧倒的にSSL－青同の強化と全学連－反戦の自的量的拡大を勝ちとり、十

月記米阻止佐藤内閣打倒の基本的方向性と体制を固めねばならない。

第二の課題は六九年の階級関係に対応、人民戦線を粉砕する反帝統一戦線の勝利的な前進である。

68・10・21斗争に対する総評岩井の騒乱罪支持三派排除声明、東大II・22斗争に対する日共の秩序防衛派との連合による妨害

この二つの政治的事件は、権力と三派の攻防を基軸とする10・8以来の階級関係を変化させるきざしであった。

一、九以降、日共民青は東大斗争において国家権力の補助部隊となり、スペイン人民戦線以来といわれる大規模なゲバルト部隊を全国動員してわれわれに対抗、敵突は構造化した。

社会党は、日韓以来、対日共対策に利用したはずの全学連と地区反戦から「飼犬に手をかまれ」組織基盤を喰い荒らされ、三派排除の一線で党内の一致をはかりつつも地区反戦の破壊と「反安保青年委員会」再建のヘゲモニーをめぐって争われてきたが大田世話人に対抗する向坂世話人が登場し解放派が三派から離脱して世話人に全面屈服し、人民戦線路線に集約されたため、曽我・向坂世話人・高見構改・樋口解放の四派がヌケント、中核およびその他反日共系排除を安定、地区反戦運動は転期にウった。

即ち、反戦運動は明確に第三期に転換し社民の社会主義・組合主義反戦に対決し、ソヴィエト運動をプロレタリア深部から形成する。われわれの革命的反戦運動が向われている。

即ち、[illegible]

全学連―反戦を両軸とする反帝統一戦線は、だが、権力との攻防関係のみではなく背側の敵、社共人民戦線派を粉砕することなくしては、ソヴィエトへとは一般的に進みえない構造となった。対人民戦線では日共に主要攻撃をおき、反帝統一戦線内部では、中核との政治論争と組織斗争を軸とすべきである。

第四課題は、党派全学連として担った政治斗争と全共斗運動として担われた学園封鎖斗争の内的論理の結合と発展の論理及び指導組織体としての党派全学連共斗林関と全国学園共斗林関との関連を止揚発展せしめる任務である。

八回同盟大会は①10・8以来党派全学連の姿まじき囲い込み運動を通して組織され斗われた政治斗争が、権力とわれわれという攻防関係では頂点に達したこと、②国家との対決を直接的課題とし、国家との対決形態を戦術形態として向う政治権力との斗争は、現局面では即自的プロレタリアートの日常的価値基準と直接的結合を持ち得ない。③したがって現局面では党派に組織された部隊が意識的計画的に斗う中央権力斗争を政治斗争の到達点としたが、中央権力斗争形態を政治斗争の量的拡大のみをもって連続することは困難であり(11・7総括)

④われわれは10・21～11・7で突き当った中央権力斗争の到達点を、その指導の意識

性を堅持し、社会的諸関係を統合し形成する国家に集約されつつも個別利害と共同利害の亀裂から個別学園斗争に広ハンに沢起する斗いを全共斗運動として封鎖占拠戦術で斗い、即自的大衆から転化した広範な大衆的実力闘争部隊（レーニンの先進的大衆の現代的表現）と結合し、これを訓練された政治同盟の活動家にきたえあげるべき方針を確定した。

そして東大闘争を経た現在、党派全学連は個別学園闘争において「ノンセクトラジカル」を媒介項として結合、全学共闘会議を普遍的統一行動機関として全国に定着させている。

全学共闘会議自体は個別闘争を非和解的に力つ攻撃的戦術を通して自己共機関として出発しながらも個別改良要求の獲得をうき抜きた時点で党派の意識性をもたぬ全共闘は自己解体するが全国的傾向の主流は東大、中大、日大にみられるごとく、個別闘争の枠を突破して全人民的課題を全市民社会に投げかけるまでに至り、権力と全市民社会の流動との関連において内部分解を必至としている。即ち東大全共闘における解放派の退潮と革マルの逃亡等が鮮明になってくる。

したがって全国学園共闘は個別学園闘争に決起しておればすべて全国共闘会議に結集しうるものではなく、全国共闘会議への参加要求が明確にされなければならない。そしてそれは個別学園の民主化攻撃要求を攻撃的封鎖戦術で闘うとりラジカルな団結の質を突破する意識性を、即ち帝国主義のアジア侵略及革命対外侵略に対応する国内の帝国主義秩序への改編攻撃に対決し、全国入試阻止－中教審答申粉砕の統一スローガンの下に闘うものでなければならない。個別学園封鎖から出発した全共闘はここで七〇年安保を闘う先進的大衆を結集する全共闘へと質的転換をとげ、文字通り革命的左翼の内部の分解を反映しつつ再編される。この過程を突破しつつあらたな質で結集する全国学園共闘こそは党派全学連の恒常的統一行動機関化を具体的に保証するものである。このような指導こそが全学連に求められているのであり、この点は七〇年安保闘争を闘う党派にとって六九年闘争が規制している誤ることのできない点である。

即ち10・8から形成された10・21闘争に至る政治闘争を帝国主義論の現代的適応を基底としつつ中央権力闘争の結節として結実化する一方、学園闘争と全共闘運動をドイツを基底とした分業論－国家共同幻想論で結括し、マッセンスト→ソヴェト運動へと位置ずける作業が併行して進行しているが、この内的論理をソヴェト運動を担りぬく学生運動として10・21以后形成されたた六九年の階級関係を突破しぬく全学連の中心任務として設定されるべきである。

この統一視点から名党派全学連の七月にむけての恒常的共闘機関化と　全国学園共闘会議の革命的再編結集を統一的に組織実践的に指ドし抜くことができるであろう。

したがってこの過程は当然2・4以后の中核派・革成諸党派の論理的実践的破産に対する反撃、即ち第一課題と結合して展開されなければならない。

第四課題は全学連の任務を指導する党自身の強化を組織問題と組織指ド上の原則を高めつつからとらねばならない。党と全学連の計画された政治闘争と、先進的大衆を結集しつつコンミューン的団結へ接近する全共闘運動の結合も東大闘争の最近局面で、全共闘の団結の質に飛躍が向れたのみならず、最終局面を担った革命的左翼諸派そのものが本位的性格を向れた。ここでふたたび先進的大衆と政治同盟で訓練された活動家と「党」の関係が問れた。

ソヴェト運動を担うものはプロレタリアヘゲモニーによる反帝統一戦線であり、統一戦線の支柱は本位党である。ソヴェト運動をめざすわが社学同→全学連の更なる質的結集力の飛躍が要請される。学生組織を基軸とし恒常的戦闘にたえうるSSLの構築こそが一切の鍵である。以上の課題を断乎ならとり全学連大会を成功させよ！

（以　上）